

第一問

(五)	か	等	志	る	正	か	(四)	(三)	(二)	(一)
a	た	が	と	個	当	つ	<p>支配の構造をもつ不平等社会が、自明の制度として確立してしまふこと。</p>	<p>平等の実現を唱えて個人の能力を重視すれば、能力の優劣による支配・被</p>	<p>さらには意志すらも遺伝や環境などの外的要因により形成されるから。</p>	<p>近代の個人は自由意志に基づいて行為するとされるが現実には、才能や人格</p>
培	ち	生	い	人	化	て				
b	で	じ	う	の	さ	は				
誕生	正	た	虚	能	れ	神				
c	化	と	構	力	た	や				
欠陥	さ	て	基	が	近	な				
	れ	も	づ	考	慮	代				
	し	個	行	為	さ	で				
	ま	人	の	の	な	は				
	う	の	自	己	責	任				
	と	い	う	こ	と	と				
	う	い	う	こ	と	と				



第三問

(四)	(三)	(二)	(一)		
<p>官が女性を弔うとひでりが解消したから。</p>	<p>千公がひでりは孝行な女性を冤罪で死刑にしたためだと指摘し、後任の長</p>	<p>千公は孝行な嫁が姑を殺したという太守の考えを改められなかったということ。</p>	<p>d</p>	<p>c</p>	<p>a</p>
			<p>孝行という評判であり</p>	<p>私の世話をして</p>	<p>裁判の判決が公平であり</p>

第四問

(四)	(三)	(二)	(一)
<p>文章を書くときには他者に通じる論理を自分自身で見出す必要があるから。</p>	<p>作品を書く行為は言語共同体に内在する根源的な力に根ざしているが、私的な</p>	<p>言語を話す人々と歴史的にも予見的にも総体として深く結びつくということ。</p>	<p>作品をつくるときには、一個人として言葉を紡ぐとする意識は影を潜めていき、言語共同体に立脚した無名性を感じさせる言葉が立ち現れるから。</p>